

許。

ヒジホウモン 秘事法門 蓮如が文明五年十二月十九日附を以て、江沼郡荻生・福田の同行中に興へた帖外御文に、『抑前住(存如)在國の時の教化によつて、まづ荻生・福田の面は、秘事をもて本とせる心はうせたりといへどもいまだ當流の眞實の法義にはもつとざるやうに見えたり。』とある。秘事と稱するは眞宗の邪道で、十劫秘事も不拜秘事もあつたが、こゝに謂ふ所は即ち後者で、越前の大町如道等が唱道した『執一念歸佛入正定聚。則自己是佛。不須別拜佛像。而偶合掌。則自拜已胸也。』とする秘事法門の一派をさすのである。初め本願寺三代覺如のその子存覺と共に越前に來た時、具に如道に諭して回心歸正せしめたが、他日またもとの邪義に復したといふから、此の法夙く江沼郡民の信奉する所となり、而して存如は之を説破教導する爲に下國したのであらう。

ヒシヤモンダキ 毘沙門龍 能美郡新保地内で、部落から一軒五東南のオボ谷にある。四段に折れ、高さ六〇米。

ヒシユウキユウデン 尾州舊傳 一冊。前田家の祖先等の事に關し、尾張愛知郡荒子村の百姓の口書を集めたもの。森田平次の秘笈叢書に收めてある。

ヒシユウタカヤマザイバンザツキ 飛州高山在番雜記 二冊。森田盛昌著。元祿五年高山城主金森出雲守頼吉が出羽に轉封せられた爲、前田綱紀は幕府の命によりて、同八年まで一年交替に藩士を派遣し、廢城の後六月引取つたまでの始末を叙してある。

ヒシヨイハザカ 美女岩坂 白山の尾添口

登路に在つて峻坂一軒餘、途甚だ狹隘、半途に女人の狀に似た大石がある。その上は千翠、鼻一名馬の背越である。美女岩坂は一に美女石坂とも書き、又略して美女坂ともいふ。

ヒジヨウザン 眉丈山 鹿島郡から羽咋郡に亘る呂知瀨の西北に連り、一に眉影山・美女山・間月峰ともいひ、里人は眉山とも乗物棒とも稱する。能登名跡志に『後の山を美女山と云ひて、千路の瀨を見おろし、向うの山を見渡し絶景至極なれば、美女山と云ふ。』とあり、文化の郡方書上には『柳田村領山より末坂村邊迄の後山を眉丈山と唱申候。或は金丸村より上棚村へ越候所を眉丈山と申といへども、左には無之。』と見える。この山塊は最高徳丸の北に於いて一八八米。全長一五軒に亘るもので、片麻岩から成り、その東南腹は斷層をなし、呂知瀨地帯帯に向かひ急斜する。

ヒジリカハ 聖川 羽咋郡呂知院内志雄庄に屬する部落。

ヒジリカハ 聖川 羽咋郡聖川領笠懸谷・長谷ヶ谷及び大平谷の三ヶ所から流出し、子浦領で子浦川に落合ふ。流程六軒許。

ヒシワキ 菱脇 能登呂知瀨の東北に濱し、酒井川の下流一帯の地で、越前製三州志には菱脇濱としてある。三州奇談菱脇の巨鱈の條に、『今濱を出で子浦・杉の屋・飯の山なと續く。左に大湖を見る、是羽咋の海なり。此江の上流を菱脇の汀といふ。菱脇の名は平家物語にも見ゆ。則羽喰の海の北表にして、大町・金丸といふ村に接し、千路の人家を西に見る。』とある。

ヒシワキノタタカヒ 菱脇の戦 天正七年

七尾城に在つた温井景隆は、五月五日金丸に居た八代肥後・八代越中等を菱脇に出して、福水の長連龍に戦を挑ましめ、連龍乃ち之に應じたが互に勝敗がなかつた。六月九日肥後等又長氏の本郷壘を陥れんと擬し、一隊は鼠子を経て陸路より、一隊は金丸より湖上に浮んで進出した。連龍因つて菱脇に出で、之を邀撃し、肥後・越中・古浦屋新助以下百五十人を斫り、追撃して佛性寺壘を略し、更に東馬場・小竹兩壘に迫つて守將山莊監物・成田武安を走らしめ、鈴木因幡の議を容れて、金丸より湖水の北邊を迂回し福水に歸陣せんとした。

時に七尾城の温井景隆は、菱脇の敗れ、金丸亦危急なるを聞き、弟三宅長盛をして二宮に出張せしめたが、金丸が既に陥ちた後であつたから、直に長氏の鉢伏山壘を襲はしめたので、因幡は自ら火を放つて之を焚き、長盛は手を空しくして七尾に入った。因幡乃ち飯山に至つて連龍を迎へ、深更相携へて福水に歸つた。世に菱脇の戦といふものは是である。

ヒシワケ 菱分 羽咋郡呂知院内尾長保に屬する部落。寛文年間本江村なる北野半兵衛が、堀替新村地先なる浦の濱に居を移して呂知瀨を開拓したが、天保十四年に至つて初めて菱分の村名を興へられたものである。

ヒスミ 日角見 源平盛衰記壽永二年五月の條に、『日角見・室尾・青崎云々までつゞきたり。』とある。今河北郡に内日角村・外日角村がある。

ヒスエ 日末 能美郡栗津郷に屬する部落。今江柴山の二湖間に挟まれる。老の道種に、『金澤にて日末・浮柳邊の芝茸・松露の類を賞美す。皮薄く和らかなる故也。』と記する。

ヒセキシユウ 秘籍集 一冊。白山比咩神社叢書の第四輯として活版に附せられたもので、國寶に指定せられて居る白山記・白山宮莊殿講中記録・三宮古記及び莊殿講中記録用紙の一面に書かれてある白山衆徒膝狀録の外、白山本宮神主職次第の五種を集めてある。

ヒゼンギミ 備前君 前田利家の女で宇喜多秀家の室になつた森姫をいふ。

ヒゼンヤゼンザエモン 備前屋善左衛門 大坂の商人。初め肥前屋。老後了味と號し、明暦三年歿。是より先寛永十六年子善十郎は加賀藩の藏宿を命ぜられたが、後に名を治右衛門と改め、隱棲して友古といひ、寛文八年歿し、その子治右衛門了牧の時、萬治二年二十人扶持を賜はつた。

ヒタキマツリ 火焚祭 羽咋郡百浦なる百沼比古神社の秋季祭には、神輿巡幸を終りて還御する時、境内の雜木を切拂ひたるものを集めて火を焚き、神輿を目かけて之を投ずる。しかして神輿火中を潜りて進むも、一人の怪我を出すことがない。之を火焚祭といふ。

ヒダケン 飛騨縣 ↓ケンセイ 縣制。

ヒダコ 干蝟 乾した蝟で、能登にも産したのである。年不詳正月十一日附畠山義綱の三條西家中務權少輔宛所の書狀に、『干蝟一雙・背脇十桶進献候。』と見える。又張り廣げて乾してあるので張蝟ともいふ。安永頃の能登の海産物を記した中に、輪島その他の張蝟とある。

ヒタノアサギリ 飛騨の朝霧 白山山上に於いて朝日晴明、四方清澄なるも、唯飛騨の方面のみ煙霧模糊午時に至つて漸く消散することがある。土人之を飛騨の朝霧と稱する。